

風土記の丘の花だより²⁸⁹

今、そしてこれから見られる植物(2025年9月20日)

夜通し鳴いているコオロギの声を聞くと、さすがに秋を感じますが、日が昇るとツクツクボウシが鳴き始めます。その声を聞くとまだまだ残暑の厳しさを感じます。彼岸が過ぎると、少しは涼しくなることを期待して、あとしばらくこの暑さを凌いで過ごすことにしましょう。



この前は、秋の七草のうちハギを紹介しましたが、今回はクズです。クズの花はマメ科特有の形です。同じマメ科のフジは下に垂れますがクズは上に伸びます。そして先がクニャッと曲がるのが可愛いです。万葉集には和歌山県の下津の大崎で詠まれた歌が残っています。「大崎の荒磯（ありそ）の渡り延（は）ふ葛の 行方も無くや恋ひ渡りなむ」クズの茎がつるとなると、行方を定めずくねくねと長く伸びる様子を、恋の行方と重ね合わせて、こんな歌を詠んだのでしょう。



この植物もマメ科です。ネコハギの花です。花が白くて丸まっていて、葉には毛が多くまるでネコです。旧谷村家住宅の西斜面や万葉植物園入り口の手前などが観察しやすいと思います。でもこんな小さな草は、気がつけば刈られていることもあり、この花に出会うのも意外と難しいのかも知れませんね。名前にハギと付きますが、一般的なハギとはまた違う仲間です。花をよく見ると、中に紫色の部分が見えます。それが大きいものもたまに見られます。



面白い名前の草、キツネノマゴ（狐の孫）の花です。さらに面白いことに、キツネノマゴはキツネノマゴ科、キツネノマゴ属の植物です。どうしてこんな名前になったのでしょうか。その語源については、いろいろな先生がいろいろな事を言っているようですが、どうやらはっきりしないようです。花一つ一つは可愛いですが、なにぶん小さすぎて、老眼の身としてはじっくり観察するのも一苦勞です。この写真はピンク色っぽいですが、白い花も見かけます。これから、あちこちで見かけるようになるでしょう。



最後は花ではなく、コナラのどんぐりです。まだ若い緑色のままで落ちています。枝葉も付いています。不自然ですね。これはハイイロチョッキリというゾウムシの仲間の昆虫の仕業です。どんぐりをよく見ると、卵を産んだ跡があります。親虫は産卵を終えると枝を切り落とします。幼虫は、どんぐりを食べて成長し、外に出て、土の中でさなぎになります。ドラマですね。コナラの木の下にたくさん落ちていますよ。探してみませんか。 松下